

認知からうつに至る 亜鉛シグナルの関与

准教授 **武田 厚司**

静岡県立大学薬学部医薬生命科学分野

日時: 2012年3月2日(金) 13:30 - 14:30

場所: 東京大学本郷キャンパス 医学部1号館 2階 N206セミナー室



成長期における亜鉛の摂取不足はすみやかに内分泌機能を変化させ、グルココルチコイド分泌を高める。その結果、ストレスに対する反応性が変化し不安やうつ様行動が増加する。亜鉛の栄養状態は認知活動に加えて精神活動と密接に関係すると考えられる。一方、亜鉛は脳内神経細胞のシナプス小胞内に存在し、シグナルファクターとしてダイナミックに脳機能を調節する。シナプス小胞に亜鉛を含む神経はグルタミン酸作動性神経のサブタイプであり、亜鉛作動性神経とも呼ばれている。亜鉛作動性神経は大脳皮質、海馬、扁桃体に豊富に存在し、学習・記憶ならびに精神活動に重要な役割を担うと考えられる。亜鉛シグナルから見た脳機能について概説する。

主催: 東京大学グローバル COE 「学融合に基づく医療システムイノベーション」
東京大学医学系研究科 疾患生命工学センター
健康環境医工学部門 教授 遠山 千春
協賛: 東京大学ナノバイオ・インテグレーション研究拠点

担当者: 聖子 ヤーネス

電話: 03-5841-1509 / Fax: 03-5841-1510

E-mail: jarnes@cnbi.t.u-tokyo.ac.jp

お申込み: <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/CMSI/>

